

藤野寛『キルケゴール：美と倫理のはざまに立つ哲学』 書評

江口 聡

藤野寛氏の『キルケゴール：美と倫理のはざまに立つ哲学』（以下「本書」）は優れたキルケゴールの倫理思想・実存思想の入門研究書である。藤野氏は解釈の対象をキルケゴール*1のいわゆる「美的著作」にほぼ限定した上で、彼の「美的なもの」の批判と、それに対応する「倫理的なもの」および「実存」の概念を明らかにしようとする。特色としては以下の二つがあげられる。(1)『イロニーの概念』『あれか／これか』といった初期作品を積極的にとりあげ、キルケゴールのロマン主義批判、特にロマン主義的イロニー批判に注目していること、(2)いわゆる「実存三段階説」を否定し、キルケゴールにとって「倫理的なもの」は当時の「美的なもの」と「宗教的なもの」を区別するために打ち込まれる「楔」であったのだという新鮮な解釈を打ち出していること、である。

本書の論述と中心的な主張はおおむねクリアで、評者による解説を必要とするものではない。そこで、本誌『新キルケゴール研究』の性格からして、研究者としてキルケゴールを読み解釈するということについて本書を通して考えておきたい。

本誌を読む人なら誰でも痛感しているように、キルケゴールを読むことはひどく難しい。デンマーク語や翻訳の問題はさておき、彼の作品には独特の「弁証法」的叙述の難渋さと曖昧さが見られ、また哲学史的・キリスト教的前提知識を要求するものであり、さらに、さまざまな諧謔や皮肉への言及を含む。加えて悪名高い仮名著作というスタイルにまつわる解釈上の独特の問題がある。そこでキルケゴールや研究文献を読む際に意識せざるをえないと評者が感

*1 本誌は『新キルケゴール研究』ではあるが、今回は著者に敬意を表して「キルケゴール」の表記を使う。

じているいくつかの点と、そうした問題に対する藤野氏の態度を見てみたい。

(1) 哲学的著作として読むか、文学作品として読むか。デカルト、ヒューム、カントといった近代の哲学者たちの著作は、通常、本人が実際に信じている事柄を主張しているものとして読まれる。彼らの主張は、のちの哲学者や研究者によって、論理的・概念的な整合性を精査され、また人間や社会についての経験的事実と照らしあわせられ、一部の主張は支持・擁護され、一部は反駁され棄却されることで評価される。一方、ある作品が文学作品として読まれる場合、著作で登場人物によってなされている主張は直接には著者のものではないとされる。むしろ、そうした主張はなんらかの文学的な効果のためにおこなわれていると理解される。そして、たとえば著者の「本当の」意図や主張が推測され、あるいは狙われている文学的な効果、作品全体として提唱されている理念や思想などが評価されることになる。

もちろん、プラトンのソクラテス対話篇をはじめとして、伝統的には哲学書にも架空の人物に発言を行なわせる形のものも少なくない。そうした作品を「哲学的」な態度で読む場合、登場する人物の誰かを著者自身の立場を代表するものとして扱うことが通例である。しかし、キェルケゴールの場合は、著作群がいわゆる仮名による「美的著作」と、実名による「宗教的著作」に分けられており、さらに美的著作の表面的な「書き手」が複数存在する。キェルケゴールの作品は、直接的な哲学的な著作として読むよりは、文学作品として距離をとって読み鑑賞し解釈する方が適切な態度であるという可能性はぬぐい去ることはできない*2。

本書での藤野氏の方針は、考察の対象を「美的著作」にほぼ限定し、その中心的な論点をキェルケゴール自身のものとみなし、かつ、純然たる「哲学」として読む、というものである。仮名と間接伝達の問題については、(1)キェルケゴールの目的が美的な人間を倫理的な方向に動かすことであり、それには直接的な

*2 たとえば『あれか／これか』はほぼ完全に文学作品であるとする見方については、Roger Poole, "Reading *Either/Or* for the Very First Time", Elsebet Jegstrup (ed.), *The New Kierkegaard*, Indiana University Press, 2004 を見よ。

知識の伝達は無効であるためであること、(2)彼自身が要求する「人と言葉の一致」という倫理的拘束のために、宗教的生き方をしているキルケゴールは美的な言葉によって語りえず、そのために仮名を使用したのだと解釈する。こうした方針自体は、多くの読者は一つの解釈法としてこうした方針に同意しうるものだろう。

(2) 複数の仮名著作間の関係をどう見るか。ある哲学者の著作が、著者の思考を直接に表していると考えられる場合には、もし著作ごとに主張が変わるように見えるなら、それは著者の成長、あるいは思想の発展や修正を反映していると素直に解釈すればよい。ところが、キルケゴールのように仮名を用いた著者の場合には問題は複雑になる。さらに『あれか／これか』や『人生行路の諸段階』のような著作は、登場人物の誰がキルケゴール本人の考え方に近いのかさえ判断しにくく、これが解釈者を悩ませている。

藤野氏は、美的著作における哲学的思索を中心にすえることで、特段の注意は行わず、自由に仮名著作間での参照を用いた解釈をおこなう。これは一つの立場ではある。ただし、藤野氏は随所で「これは本来のキルケゴールの思考ではない」といった取捨選択を行っており、それがいかなる基準に基づいたものなのか疑問が残る。意地悪な見方をすれば、藤野氏の解釈に直接有利なものがキルケゴール本人思考を直接表現したもので、そうでないものはなんらかの隠された意図のために本人のものではない主張がなされている、と恣意的に読んでいるとも言える。評者にはキルケゴール自身の思想が(短い生涯のなかでも)発展し変化していると解釈することも可能であるため、主張の取捨には警戒や注意が必要なのではないかと思われる。特に、「倫理的なもの」に関しては、『あれか／これか』と『恐れとおののき』と『死に至る病』ではまったく内実が違うのではないかという疑いが評者にはある。そのため、第6章「「倫理」概念の変容」での仮名著作群の「倫理」概念の異同の解釈に対して十分には納得できない。この点については諸氏による評価を待つことにしたい。

(3) 二次文献・三次文献をどの程度参照するか。重要な哲学者には解釈の歴史

があり、現在でも毎年大量の研究論文・書籍が出版され続けている。我々が研究者として有力な解釈とは違う読みを提出する場合には、そうした有力な解釈の難点を明らかにしなければならない。藤野氏は、他研究者の解釈や研究動向を踏まえた「研究書」を書くつもりではなかったことを宣言している。これはアドルノに由来する「専門家となることは哲学を放棄することだ」という氏の信念の反映であって、素手でキェルケゴールと格闘している凄みがある。評者にとってその迫力は本書を読む喜びの一部だった。

ただしここで、藤野氏のみならず、研究者の多くが二次研究文献をほとんど使用しないことは、日本のキェルケゴール研究の大きな問題点であることを指摘しておきたい。国内の研究においては、引用・参照されるものはキェルケゴール本人の文章であり、他の研究者による二次文献が参照され反駁されることは少ない。研究者は一般にキェルケゴール本人のものしか読んでいないのではないかと思わざるをえないことがしばしばある。

本書では、中心的論点の一つは「実存三段階説」を反駁し「倫理という「楔」」説を提唱することにある。そうであるなら、藤野氏は対立する解釈の実際をとりあげ反駁する必要があるのではないか。少なくとも、実際に実存三段階説をとる研究者をとりあげて、どのような議論や解釈によってそうした解釈が提唱されているか検討する必要があるはずだ。しかし、評者は、美的段階から倫理的段階を経て宗教的段階に（それぞれ質的な跳躍をおこないつつ）至るという「実存三段階説」を唱えている研究文献をすぐには示すことができない*3。

本書で扱われているキェルケゴールの倫理的立場といったテーマについて英語圏での標準的な解釈を知りたい読者は、たとえば Patrick Gardiner の *Kierkegaard* を参照してほしい*4。こうした20世紀後半の研究では、そもそも

*3 これはウォルター・ラウリーなどの20世紀前半のキェルケゴール紹介者たちの見解ではないかと思われるが、評者には自信がない。

*4 Patrick Gardiner, *Kierkegaard*, Oxford University Press, 1988. 邦訳は、パトリック・ガーディナー『キェルケゴール』、教文館、1996。原書は過去にOxford出版のPast Mastersシリーズの一卷として出版されたものだが、現在OxfordのA Very Short Introductionシリーズに収録されており入手しやすい。邦訳の訳文には問題が多いので、原書と照らしあわせることが必要である。この訳書についての研究者

「三段階」のような解釈は一般的ではない。また、キルケゴールの「美的なもの」批判が、ロマン主義的・観照的態度と宗教との混同に対するものであるという意識は本書と共通しているが、「倫理的なもの」はキルケゴールの著作ごとに変化・発展しており、その著作ごとにとらえるべきだとされている。藤野氏自身の解釈は全体として筋の通った有望なものだと思われるが、対立する解釈がありえるのであれば、それを明確にし、反駁し、自説との異同を明らかにすることが哲学的な態度ではないだろうか。たしかに、キルケゴールの「専門家」——たとえば、もっぱらキルケゴールや自分の関心ある著作しか読まない研究者——になることが哲学に反することだとしても、他の哲学研究者の解釈や解釈史を知ることが哲学に反することはまったくありえないように思われる。

(4) 好意的に解釈するか、批判的か。我々が哲学者を読み、研究し、解釈を試みるのは、基本的にその哲学者の思索に魅力と美点を感じているからである。したがって、基本的には最大限好意的に解釈したいものである。しかし問題は、ある哲学者を最大限に好意的に解釈しようとするとき、かつ、その哲学者の発想や論述が複雑で難渋であるとき、我々は整合的な解釈を提出するために、自分にとって都合のよい場所だけに注目してしまいがちなことである。もちろん、これは我々の限られた能力と各種資源を考えれば、ある程度避けられない。しかしそうした試みが度を過ぎれば、ある哲学者の著作に見いだすものは、当の解釈者がもともと抱いていたアイディア、彼がその哲学者を読む前に自分で実感として納得しているものだけになってしまう。

あまりに好意的な解釈を施そうとする際のもう一つの落とし穴は、その哲学者を批判し限界づけることを忘れてしまうことである。そして本書に対する評者の一番の不満はここにある。

本書は基本的にキルケゴールの思想を、美的な観点からキリスト教を理解・

の評価を目にすることがなかったことは、日本のキルケゴール研究の問題点——すなわち、アカデミックな相互参照と相互批判を怠っていること——を具現しているように思われる。

把握しようとする当時のロマン派的思潮に対する、実存的・倫理的な立場からの反駁とみるものである。この目的のため、藤野氏は18世紀末からの思想史と『イロニーの概念』からはじまるキェルケゴールの思索における「美的なもの」の多様性を丹念に拾いあげ、キェルケゴールの批判の眼目が快樂説や美的享樂等に対するものではなく、つまるところその「観照的」（あるいは理論的）態度にあること、そしてキェルケゴールの「倫理的なもの」が実践的な「自己反省」や「自己の選択」にあることを明らかにしようとしている。そしてその試みはおおむね成功していると評者は判断する。なにかを眺め、抽象的に理解するだけでは本当の人生ではない。我々は自分の人生を選択しなければならない。そしてその選択はよい選択でなければならならず、それを我々の実際の人生で実行し生きなければならない。我々は人生の上でさまざまな外的な困難だけでなく、自分自身の内部にあるさまざまな矛盾する課題を反省しなければならず、その結果自己の無力さや傲慢さを意識し絶望し、場合によっては超越的な救いの恩寵を求められないこともあるかもしれない。

しかしここで読者におそらく多数の疑問が浮かんでくるはずである。たとえば、キェルケゴールが描写するような「美的な実存（生き方）」「倫理的な実存」などといった生き方をしている人は本当にいるのだろうか？我々は普通、いつも衝動や感情に動かされているわけでもなければ、いつも自己を選択しているわけでもない。いったん「自己を選択」すればそれですむものではない。そうした人物はキェルケゴールの頭のなかだけに存在する極端な抽象物であって、キェルケゴールはまさにそうした抽象物を「観照」し批判しているだけなのではないだろうか。

また、「自己選択」としての倫理的なものという概念は、あまりにも抽象的ではないか。「自己の選択」は現代に生きる我々の理想の一つである。こうした「自己」の理解そのものがキェルケゴールに続く「実存主義哲学者」や心理学者の影響下にあるとしても、我々はキェルケゴールを読まずとも、すでに自分を探し求め、また自分を選択したいと熱望している。これがキェルケゴールに魅力を見て手にとった読者の実感だろう。しかしその「自己を選択する」というのは具体的にはどういうことなのだろうか。自己を選択しさえすれば、どんな自

己でもよいのだろうか。どんな「自己」でもよいわけではないとすれば、どういう基準にしたがって選択するべきなのだろうか。キリスト教信仰だけが唯一の道なのだろうか。

もちろん、こうした疑問は数えきれない。キルケゴール的なキリスト教信仰に共感することができない場合はなおさらのことである。こうしたふつうの問いを提出しただけで、自分のキルケゴール理解があやふやなものだと意識せざるをえないのが通常の読者だろう。むしろ我々はこうした素朴な問いを提出し答を探すことを恐れているのではないだろうか。先にあげたガーディナーはこうした疑問に答えるとまではいかないまでも、そうしたさまざまな哲学的な問題、解釈上の問題があることは指摘している。本書に欠けているのはこういった批判的態度のように思われる。

先に述べたように、自分が共感する哲学者・思想家を整合的に解釈するために自分が好む主張をとりだしてしまえば、残るのは当然自分が共感し同意し、納得しているものだけである。そうした自分が共感し同意するものは、まさに我々の実存と深くかかわっており、それに批判の目を向けることは、むしろ不可能なのかもしれない。しかしそれはキルケゴールを読む態度としてほんとうに正当なものなのだろうか。本書の「あとがき」には、キルケゴールのアクチュアリティを問われたときに、それは「キルケゴールと論じる」ことによって答えられるという表現があるのだが、評者は当初この一文を「キルケゴールと対決する」ことだと読んだ。しかし何度か全体を読みなおすうちに、おそらくこれは、「なんらかの対象をキルケゴールとともに論じる」なのだろうと気づいて驚いた。キルケゴールを読むとき、我々は彼と彼の著作に対する共感だけでなく、「共感的反感」をもはっきりさせ共有するべきではないだろうか。

もちろん上にあげたような疑問には、キルケゴールとともに答える方法はあるだろう。本書でもそうした試みも部分的にはなされているように思われる箇所もある。しかし我々は、いったんはもっとキルケゴールと距離をとって、彼と闘ってみることが必要なのではないだろうか。これは日本のキルケゴール研究全体について感じる不満でもある。

キルケゴール生誕200年を越えた今後、我々はもっと解釈史を意識し、キル

ケゴールに対する批判的な研究と相互批判をおこなうべきだとも思われる。ともあれ本書はキェルケゴールの「美的なもの」および「倫理的なもの」のはっきりした解釈を打ち出したという点で、今後の国内のキェルケゴール研究にとって、これらの概念の解釈の試みの一つの基準として重要な著作になるだろう。